デルフィーヌ夫人（第１章−第８章）

Madame Delphine（1881）

George Washington Cable（1844-1925）

ジョージ・ワシントン・ケイブル 著
藤　野　功　一 訳

第１章　古い屋敷

ニューオーリンズのセント・チャールズ・ホテルから数歩離れて、街の中心の通りであるキャナル・ストリートに出てみると、その通りの街角、アーケードになっている歩道やその歩道の外側に花売りの女性たちが座り込んでいて、彼女たちが売っている香（かぐわ）しい花々のおかげで、通りは甘い香りに満ちている。そして、かなりの人々が――もしこれがカーニバルの季節だったらもっと人が多いのだが――キャナル・ストリートを歩いていることだろう。

けれども、今度は反対方向にぐるりと振り向いて歩いて行ってみると、静かで細い道が続いてゆく。これはロマンティックな過去を好む、クレオール時代の名残を愛する人によってよくロイヤル・ストリートと呼ばれた道だ。いくつかのレストランや競売屋、家具問屋を通り過ぎると、ついさっきまで売り買いが活発に騒がしく行われている中央通りにいたことが信じられないような、古く朽ちた建物に囲まれた場所にいることに気づく。そこには古くからの、異国情緒に溢れた家庭生活があり、二階にはむかし商売で栄えていたころの名残が見え隠れし、あらゆるものに、長い長い安息日を経（へ）たあとの腐敗がはびこっている。この通りをやってくる乗り物は少なく、通ったとしてもただ通り過ぎていくだけ、むかしの大きな店は小さな店に縮小され、そこかしこに、ピカピカ光るつぎを当てているかのように、急に目につくようになった中国人の屋台が

立っている。多くの大きくて重々しい屋敷のドアは閉め切っており、締め金がかかり、蜘蛛の巣で灰色がかり、通りに面した窓の多くは釘で打ち付けられている。バルコニーは半ば汚れ、さびついて腐食し、苔むしたアーチや小道はむかしのフランスとスペイン折衷のスタッコ壁のブロックでできていて、その薄汚い様子はほとんど東洋風な趣といったぐあいだ。

けれども、ここにはまだ美しさが残っている。絵のように美しいものは何もないが、ときおり目に快いものがみつけられ、ときには贅沢なものや、正門の掛け金が外されたくぐり戸ごしに、赤く塗られたブロック敷きの小道や、濃い色のヤシの木の葉や薄い色のバナナの葉、大理石や花崗岩の石造建築や花いっぱいの花壇、あるいは重々しい木張りの雨戸の隙間の、爬虫類のように物憂(ものう)くあいた隙間から、美しいレースの端や金襴緞子(きんらんどんす)、銀や青銅の調度品がのぞいていたり、それとほとんど同じくらい豪華な古い調度品がのぞいている。

そこに住む人々の顔はなかに引きこもっていて見えない。通りがかりの者からは、調和のとれていない住居の様子はくすんでボロボロに見える。けれども、彼らと打ち解けて話をしていると、洗練された美しさの女性が一人——あるいは二人、三人——とあなたのそばを通っていく。

さて、こうしてこの古い通りを十分奥まで進んでみると、ほら、何々——とか言う（この地域の名前はまるで幽霊のように捉えどころのない名前なのだ）場所と交わるところに出る。

しかしながら、あなたも少々この界隈の楽しみ方がわかってきたので、きっと右手の側にあるものに気づかないということはないだろう。広場の半ば、小さくて屋根の低いレンガ造りの中二階のある家が歩道にせり出ている。風雨にさらされてひっそりしている様子は、まるで年寄りの乞食が眠りこけているかのようだ。その朽ち果てた屋根は鈍くて赤いタイル張りで、内側にそり曲がるかのようにあなたの方に向けて傾斜している。屋根の上には草が茂って、長い年月を経たおかげでアキノキリンソウの黄色い花が嬉しそうに咲いている。せり出した広い軒には杖を差し出せばさわれそうだ。ドアと窓には板張りがしてあって、小窓と同じような蝶番(ちょうつがい)がついている。しっかり閉まっているので、無理に開けようとしたら指や爪を傷めてしまうだろう。レンガ以外には、割れ目

や隙間はどこにもない。きっとあなたは、この家は破傷風で開口障害にかかった患者みたいだ、と言うかもしれない。ドアが二つあって、そのどちらにも欠けてぼろぼろの大理石の踏み台が付いている。その家に沿って歩道をもっと進んでいくと、高い、板張りの塀で中が見えないように閉め切った庭がある。その庭の果樹の先っぽだけが、わずかに見えるかもしれない。ザクロや桃、バナナ、イチジク、西洋梨など。板塀に近づくと、その塀がひどく古いものだということがわかる。

この狭い道を見下ろしながら住んでいる住民たち、３階建の屋敷に住んでいる者たち――もともとはもっと見栄えの良い暮らしをしていたらしいが、この厳しいご時世がドアを飾っていたペンキをすっかりはがしてしまっている――が、あなたにこうおしえてくれるだろう。

「そう、その家はまだ人が住んでんだよ。人がいるんだ」

そしてこれがどうやらこの家について得られる情報の全てらしい。――彼らが情報を出し惜しみしているというわけではなく、ただ彼らはあなたがそんなことを知りたがっているとは思っていないだけなのだ。そしてとうとう、もしかしたら、ちょうどあなたが帰ろうと思って踵（きびす）を返したときに、あなたに話しかけてくれた人が、たった一言で、全くつまらないといった様子で、このような状況をすべて説明してくれることばをたった一言だけ

「やつらはクアドルーン（四分の一黒人）なんだよ」

と漏らすかもしれない。

そしてその話しかけてくれた人物は、以前この場所がもっと見栄えが良かった頃のことを話そうと立ち上がり、この地域の家々がもっとそれぞれ間隔をあけて立っており、あの庭が一つの広場分くらいあった頃のことをはなすかもしれない。

ここには、六十年かそれ以上前、デルフィーヌ・カラゼが住んでいた。あるいは、彼女を知る幾人かの人々からは、いつもデルフィーヌ夫人と呼ばれていた、あの女性が住んでいたのだ。彼女は自分の家を持っていた。その家は、彼女が若く美しい盛りだった頃につれあいだった男から与えられたものだというのは、誰もが知っている周知の事実で、たとえ六十年前であってもそれが町の

噂の種になるというようなこともなかった。彼女はその界隈に住む人たちから後ろ指を指されることもなかったし、彼女の家がなにか「目立つ」わけでもなかった。世間から身を退いた、白人に四分の一の黒人の血の混じった女性についての謎めいた部分を見抜くというのは、あらゆるクレオール人の推測の力をはるかに凌ぐ難題である。そしてその謎の中でも決してやすやすと解き明かせないのが、臆病で落ち着きのない、デルフィーヌ夫人そのものなのだ。

第2章　デルフィーヌ夫人

十九世紀の最初の二十五年間、ニューオーリンズの自由黒人の地位にいる人々はこの世の春を謳歌していた。それより以前の世代は、一方で、スペイン系アメリカ人の開拓地の生活とないまぜになって無作法になったフランス植民地の軍隊の陽気な無鉄砲さの血を生まれ持ち、そしてもう一方では、さほど黒人らしくないアフリカ生まれの人々からえり抜かれ、船の舷側（げんそく）から、鳥の羽根やらコヤスガイやら銅線の切れ端やらが彼らの頭に巻くターバンにくっついたまま買い上げられた魅力的なアフリカ＝エチオピア生まれの人々の血を引いていた――こうした昔の世代は、戦争の傷と個人の気まぐれに満ちた運命を経験した父親たちと、奴隷の状態にいた後に解放された経験を持つ母親たちから生まれ、もっとも美しい者だけが生き残るという原則のもと、七十五年もの年月をかけて黒い肌の色を白くして、行き過ぎるくらいの優秀さと妖精のような優美さと美しさを持つに至ったのち、ほんのわずかばかりのあいだ豪奢な生活を送ることができた。私達の現在の状況から見ても、この午後に黒人の血を引く人々の住む界隈であなたが見かけたであろう「有色人種」の暮らしぶりからも、過去の優雅な暮らしぶりの証拠が幾つも見受けられたはずである。ワシントン・アーヴィングの短編「スリーピー・ホロウの伝説」に出てくる主人公イカボッドなみに目につく陰鬱な額にむやみと化粧をはたき、外から見えないように閉め切った庭の出入り口のところに椅子を出して、まるで黄色い子猫の巣のようにしたところから、じっと貴方が通り過ぎるのを首をすくめながら眺めているのだ。

けれども、十九世紀のいま、目の前にいる彼らは二代目か三代目で、「黒人の

血を引く」女性たちというのは（それというのも、私達はそのころ確立した社会階層を厳密に限定して定義するために、この「黒人の血を引く」のは女性たちの側であることをはっきりさせなければならないのである）みごとな輝きをまとっている。経験豊かな旅行者たちは口をつぐんで、この女性たちの喜ばしげな様子や、その容姿の非の打ち所のない様子、その体つきの見事なこと、美しく変化に富んだスタイル――それというのも、彼女たちの中には純粋な白色人種の血も入っているからだ――を見つめる。――その魅惑的な振る舞い、そのはじけるような快活さ、その慎み深さとかわいらしい機知、優美なダンス、謙虚な礼儀正しさ、趣味の良い服装と気品。きわめて優美で詩的な感覚をもつ彼女等はまさにこの土地の魅惑的な妖精（セイレーン）である。この土地は「いつも午後のような」ありさまだが――つまり、勤勉なキリスト教文化が一時的にせよ牧歌的な文化に打ち負かされたという意味でだが――そのためにこの土地はまことに美しく、魅惑的で、当時の書き手たちが特別に幾つもの章をこの土地にささげたが、その描写は社会哲学者の書いたもののように正確というよりは、その土地同様に独特の魅力を持っていた。

「純血」の白人男性によって彼女たちのために催される大舞踏会の数々はその当時の人々にとっては現在のカーニヴァルのようなものであった。たまたま同じ晩に複数の大舞踏会が開かれると、人々はどちらにも行きたがり、どちらも失敗に終わるのであった。政府の有力者は――市の政治家だろうが、州の政治家だろうが、連邦政府の政治家だろうが――そして軍人、知的職業、様々な組合の人々であろうが――要するに、聖職者を除くあらゆる種類の白人男性の裕福な階級の者たちはみんなやってきていた。粗野な人たちがパーティーに来るのを除外するためにチケットは高価であった。よそから来た者でも裕福であれば必ず呼ばれた。女たちはとても美しかった！彼女たちは首から足までを覆う絹のゆったりとした衣装を着て、そしてその上、だれもが天真爛漫でまるでそのだれもが血がつながっているのではないかと思えるような似通った魅力には、一種の哀愁がただよっていた。

もしあなたが見知らぬ人でなければ、デルフィーヌ夫人は自分からあなたに話しかけて、きっと自分の抱え込んでいる事情をすべて話してくれたことだろ

う。私が思うに、そうやって話すときにはきっと涙ながらに話すことになるだろうと思う。

けれども、私たちが話している時代（1821-22 年）には彼女の輝いていた時代はとうに過ぎていて、デルフィーヌ夫人は主に家の中にこもって仕事をし、そして閉め切った家の中でその生涯をひっそりと終えようとする頃なのであった。彼女は素晴らしい女性だったし、近隣の人々もそう言っていた――そしてそのことは、彼らが思っていた以上にほぼ事実であったのだ。彼女が教会に通って、帰ってくるとき以外、彼らが彼女の姿を目にすることは滅多になかった。小柄で、どちらかといえば疲れ切った顔をして、大変良い身なりをした肌の浅黒い黒人の血を受け継いだ女性で、その顔に浮かんでいる考え深い表情を描写しようと思うと、それにはかなり長い説明がいるような顔をしている。あえて言うなら、いかにも未亡人の女性のような姿をしている。

デルフィーヌ夫人の家がどのようなものかというと、まずはその上品な通りの歩道に面するのに相応しいような門構えについて言っておかなければならないだろう。その姿は既に古びてしまって、もはやその頃でも既に使われなくなって久しく、門は針金でぐるぐる巻きにされて、柱にくくりつけられているといった状態である。

さてそれでは、別の人物に話を移そう。

第 3 章　ルメートル大尉

見た目では年齢が分からない男というものがいるが、彼もそのひとりだった。三十歳にも見えるし、四十歳にも、四十五歳にも見える。彼の顔をみても、その皺が年齢によるものなのか、それともただ天候によって刻まれたものかも分からないために、年齢は分からない。彼は重々しく静かだが、同時に聡明な表情をしていて、それは彼の優美な金髪と彼の青い目と相まって、すぐに人々の感嘆を勝ち取り、そしてその後は長く記憶に残るのであった。彼の顔をじっくりと見たあとでは、人々は彼がいっそう若く感じられる。だが、年のことは別として、彼を育てた者が必死で仕立て上げようとした風変わりな様子が原因というわけでもなく、彼は実に奇妙な男であった。

彼を育てたのは、母親でも父親でもなかった。彼はそのどちらも小さな頃になくしてしまい、しわくちゃに年老いた植民地学校の軍人上がりの祖父の世話になったのだった。厳格な祖父は、軍神マルスまでさかのぼることのできる血統をもつ純血のフランス系クレオールの白人として、非の打ち所のない社会的地位を持つ、獰猛（どうもう）で残忍な男として「自分の息子」を立派に育てようと、絶え間のない努力をした。

「いいか、息子よ」と、彼は朝の目覚めのコーヒーと同じように毎度毎度、命令口調で聞かされるのだった「お前の家系はどんな政府の決まりも、どんな宗教上の定めも、守るようなことはして来なかったんじゃ」と。この老人がこのことを心にとどめさせようとなんども繰り返していたのは、看護婦の腕にいた頃から、彼が一種の表情を、従順な素直さではなく、むしろ穏やかな、*冷静な判断力のある*博愛に満ちた表情をしていたからだろう。老人の家の者たちは、この子供の表情を見るたびにうれし涙にくれるのだったが、この子供の保護者たる無骨な老人は、この顔の表情をなんとかしてやろうと躍起になった。その表情には王者の風格とか、あるいは向こう見ずの大胆さが足りないのだ。だが、うまく育てれば、そういった類いの表情をすぐにするようになるだろう。

そして、まことにそのとおりで、二十一歳になった頃（名はウルシン・ルメートル）、彼の祖父の苦労はようやく成功したように見えた。彼はその尊敬すべき指導者である祖父が社交界に向けるときの顔つきと同じようには、厳しい顔つきをせず、声を荒げることもなかったが、まるでよく狙った銃口のように静かで残酷であり、老人は自分の教育が上首尾に終わったのを誇り高く、満足げに眺めるのだった。老人が彼をそこまで教育したので、彼はあらゆる悪行も、あるいはあらゆる善行もなそうとはしなかったが、自己主張の原則には忠実に従った。あともう少し，そこかしこを仕上げれば完璧というところであったが、そのときに老人が急死してしまった。しかしながら、老人が誇り高くも満足したことには、老人はついに死の床に横たわる前に、ウルシンが礼儀正しさにおいても、また、その自尊心においても、歴史的に有名な洗練された紳士たち、ラフィート兄弟の好敵手となり、同輩となったのを目にすることができたのであった。

このラフィート兄弟二人は、若きルメートルがその威厳の極みに達した頃（おそらく1808年から1812年のころだが）、ただの鍛冶屋商人と名乗っていたが、この鍛冶屋商人という言葉は、金回りのよい、いわば自分たちの手を煩わせて鍛冶などすることのない名目上の鍛冶屋ということを意味しているのであり、彼らは聖職者よりも少しばかり身分が上で、社交界の中で、地域の支配者たちと交流しているような上流の人物たちだった。けれども彼らは未知の可能性に満ち、活動的で、税関など全く信用ならないとおおっぴらに発言している人物たちでもあった（つまり、税関を通さず密輸をおおっぴらに行うことを意味する）。彼らは密輸によって大いに栄え、この頃に行われた大きなカーニヴァルで、彼らはマンチャックとバラタリアの公爵から特権をもらうほどの立場でもあった。

若きウルシン・ルメートル（正式にその下の名を呼ぶなら、ルメートル・ヴィヌヴィエイユ）は彼らと心からの親友であるばかりではなく、利害が一致する仲間同士であった。そして、彼の二人の友人であるラフィート兄弟は自分たちの密輸活動をいわば一種の起業として考えていて、その結果ルメートルもその、いわゆる鍛冶屋家業に手を貸す一員として振る舞っていた。要するに彼らは、実際のところ、腰まで裸の光り輝く黒々とした肉体をもつアフリカ出身の怪力サムソンよろしく、セント・ピエール・ストリートで鍛冶屋のハンマーの音を鳴り響かせて鍛冶屋のまねごとをしているという訳ではなく――このころの人々は自分たちのやっていることについて、言葉を婉曲にして表現しなければならないなど思いもよらなかったのだ――おおっぴらに密輸業者として名を馳せていたのである。

密輸業者と愛国者――いったいどういう違いがあるのだろうか。結局のところ、彼らのやっていることの実態を言ってみれば、スペイン統治下にて、いわば国内の範囲をこえた収益法を敵国の船にまで適用し、敵国の財産をせしめて、世界中のあらゆる人々のポケットや金皿から、あらゆる金銭を飲み込もうとするスペインの国庫に金を納めさせることに手を貸してやっているというようなものだった。そしてこのころには、スペインからより締め付けのゆるやかなアメリカ政府に政権が移りつつあり、こんどはアメリカの国庫の方にはすくなく

とも関税が入ればそれでよいというようになっていった。けれども、その変更はまだなされたばかりのもので、そのへんのことを新たなアメリカの役人相手に臨機応変にうまくやるにはたいへんな手腕が必要であった。このあたりの金銭の微妙な手さばきをするにあたって、ルメートル大尉がそうだった以上の人物が輩出するというようなことはほとんどあるまい――その名誉ある魂、礼儀作法の頂点のような仕草、ライオンのような勇猛さ、象のような度量の大きさ、気さくさ――まさにルメートルはこういった財務をやり遂げるのにふさわしい男だった！いや、それ以上だった。彼の署名はトゥルーズ・ストリートでも十分通用した。歓楽街でのもっぱらの評判では、密輸業とは、それをやってのけている当人が高尚な美徳をもっている事を証明する第一級の証拠だというのである。

それからもう何年もたった。歴史上のいろいろなこと――ニューオーリンズを中心として栄えたルイジアナは七年戦争（フレンチ・インディアン戦争）後のパリ条約（1763年）でフランスからスペインに割譲されていたが、スペインは1800年にナポレオンとの密約でルイジアナをフランスに返還した。その後アメリカ大統領ジェファソンがニューオーリンズの買収をナポレオンに持ちかけ、大陸でのナポレオン戦争の戦費の必要なナポレオンがそれに対し、ニューオーリンズだけでなくミシシッピ以西のルイジアナ全域の売却に応じたので、わずか三年後、1803年にアメリカ合衆国によるルイジアナ買収が行われた――が起こった後、こういったスペインからアメリカへ統治が移行した頃のエピソードもすべて歴史上の出来事となっていってしまった。このあたりの共同体も、だんだんとアメリカ政府の厳しい統治下に置かれるようになり、政府の利益になるように管理され始め、密輸業というものも、その誇りを奪い去られ、恥ずべき、有害で、軽蔑すべきものとなっていった。新たに厳しくなった法律のもとで役人たちは密輸業者たちを罪人として責め立てるようになり、密輸業者の中の何人かは殺人を犯した犯罪者に仕立て上げられてしまった。しばらくして、密輸業は儲かる仕事ではなくなり、とうとう進取の気質をもつラフィートたちは――彼らはなんでも自分たちの頭で考えて解決する人たちだった――自分たちのこれからの生活のことを考えて――地元の有力者と話をつけて「私掠船（しりゃくせん）

(privateer: 免許を与えられて敵国の船を襲撃、拿捕することを許された民間船)」を持つことになった。

すると、その後すぐ、それを聞きつけたアメリカ政府は、それは違法だということで、彼らの首に海賊として賞金をかけた。その後、さらに、これらの無法者とされてアメリカを追われた海賊たちは、大英帝国から、もしも条件をのむなら、金と地位を保証するという提案をされた。だが、この懐柔策をきっぱりとはねのけて、彼らは自分たちの生まれ故郷の町のニューオーリンズに海から近づいて帰って行ったので、彼らはイギリスからもアメリカからも賞金首として追われることとなり、市場から追い出されたのだが、それから彼らはもう一度、米英戦争（1812-15）真っ最中のアンドリュー・ジャクソンに会って戦争に協力を申し出て、その代わりに自分たちを受け入れてくれるように取引を行い、彼らはアメリカに大歓迎され、そしてアメリカの同胞として命知らずの者どもを率いてニューオーリンズでイギリス軍相手に華々しく戦い、そして戦後——ここで何事にもついて回る伝統的な結末が彼らを襲うのだが——相変わらず海賊行為を続けた彼らはアメリカから罪人として追われることとなり、それ以降決して姿を見せなかった。

ルメートル大尉は殺されたり、傷を負った中には入らなかったが、行方不明者となったのだった。

第4章　三人の友人

ニューオーリンズの街の中でももっとも丸々とした顔をして幸せそうにしているのは、ジェローム神父という名で親しまれている小柄な司祭であった。彼はクレオールで、この街のもっとも重きをなす一家の一員であった。彼の住居は小さい田舎家で、高くて閉め切った柵のすぐ内側の高い支柱の上に建っており、そこに行くには緑色に塗った板作りの門から外付けされた階段を上がってゆかねばならなかった。その家は縮緬（ちりめん）のようなマートル（銀梅花（ぎんばいか））に覆われ、裏手の方には下り階段がついていて、そこから板張りの道が教会の裏口まで続いていて、その教会の信者たちに彼は毎日祝福の手を広げているのだった。その通りの名前は——しまった、このあたりはあまり多くの情報のないところな

ので、通りの名前ははっきりとしないのだ。教会はところどころに立っているのだが、大きな大聖堂とウルスリーヌ（カトリックの宗教上の目的で使用する建物）の建物以外については、当時の教会についてはほとんど情報がないのである。ただ確かなことといえば、ジェローム神父の粗末な教会は最近建てられた「繁華街のもの」であって、年月の経過に耐え、フランス革命時代のパクストンの総裁政府の暴政に、まるで火事を逃れるように耐えてきたのだろう。彼の応接間はみすぼらしく、絨毯も敷かれていなかった。鼻をひくつかせれば、そこには貧しさに徹するという誓約のにおいがはっきりと感じられたことだろう。彼の寝室はがらんとしていて清潔であり、そこに置かれたベッドは狭くて硬かった。この二つの部屋の間には食堂があるのだが、それは見るものが笑いを抑えられないようなありさまであった。テーブルは小さく、丈夫で、その部屋の家具はすべて質実剛健で、質の良い木材でできており、うまくひだが付けられているというくらいで十分というような仕上げが施されていた。ジェローム神父の説明によると、彼の母親と妹が主にこれらをしつらえて、彼女らはこの借家を――あるいはこの区画を――貧乏臭く見えるのを許さなかったということらしい。そこには、応接間と同じ匂いが立ち込めてはいるが、より世俗的で快楽主義的な雰囲気が漂い、それが興味深いことにジェローム神父の丸々と太った、血色の良い顔に浮かぶ微笑みがどのような性質のものなのか、物語っているかのようだった。

この部屋と、そしてこの小さく丸いテーブルの周りには、ジェローム神父とともに二人の友人が時折座ったものだった。この二人の友人とジェローム神父は大変仲が良く――そのうちの一人はエヴァリステ・ヴァリアットで、幼い子供の頃からの遊び仲間で、今は彼の妹の夫で、義理の弟になっている。もう一人はジーン・トンプソンで、これも若い頃からの遊び仲間だった。どちらも、この小柄な司祭自身と同じように、今はもう仲間ではなくなってしまった、昔の四番目の遊び仲間のことを、後悔とともに覚えており、ジェローム神父と同じように、ながいこと、それについて思い悩んでいた。司祭の義理の弟は医者で、もう一人は弁護士で、今はもうここにいないあともう一人の孤独な独り者の義理の兄弟だった――しかし彼らはこの小さなテーブルの周りに集まるのが

大好きだったし、また、大人になってから集まってからも、心はいつも少年の頃に戻るのだった。彼らのなかの誰がリーダーというわけではない。若い頃は、彼らはいつも、今ではもう会うこともなくなったもう一人の友人の男に、まるでその男が酋長であるかのように従っていた。そして彼らはいまだに、男のことを考え、そして男のことを噂し合っていた。そして、彼らの集まりでは、男のことを詮索し、まるでいまでも彼らの仲間の一人であるかのように、彼らは男が自分たちができないような大きなことを成し遂げてくれるのではないかと思うのだった。

彼らはある日、いつものようにお互い親しげに座り、ちびちびと飲んでは様々な物事について、気楽で、あけっぴろげで、小生意気な調子で理屈を述べたり、臆測を述べたりしていた。会話の大部分は医師と司祭の母語であるフランス語で、半分アメリカ人で、法律家であるジーン・トンプソンもフランス語を器用に操って会話をしていたが、時折英語を交え、ときに曖昧な笑いをするのだった。話題になっているのはその場にいない男のことであった。

ジェローム神父は大体次のようなことを述べた。

「人間の行動や人間の人生がどれくらい罪深いかというのは、限界のある人間の心では到底推し量れまセンよ。ただ無限の力を持つ神だけが、どれほど我々が、あるいは我々の兄弟や父が罪深いかを決めて下さる。我々は皆、お互いの罪を分け合っているのデス。あらゆる罪深い行動には我々みんなに共同責任というものがあります。アダム以来、どの人間も――もちろん、アダム自身も――罪深い存在なんデスよ。だからこそ、私自身は罪や犯罪行為をしようと思ったことなどないが、罪深い行為の共犯者として私の良心が私をとがめるのデス」

「一言で言えば」と医者のエヴァリステ・ヴァリアットは言った。「貴方の主への祈りからこぼれ落ちて罪を犯した者たちに対しては、我々も責任の一端があるということデスかな」

ジェローム神父は微笑んだ。

「イヤイヤ。人間というものは自分自身に罪がないとはなかなか言い切れないものデスよ。我々の最初の父親であるアダムもそうしようとしましたが、そういう申し立ては許されませんでした。しかし考えてもご覧なさい、いま、ここ

にいない我々の友人に関して考えてみれば、彼の犯した道徳上の過ちというものについても、我々共同体全体にその責任があるといえるのデス。もっと別の種類の人間と一緒にいて、もっと賢く育てられ、そして、いい友人に恵まれたら、彼はどれほど違った人間になっていたことでしょう！我々こそが、彼を悪名から救ってやることができたのに、彼をまたなんで犯罪者と呼ぶことができるでしょうか？」

そう言うと、彼はジーン・トンプソンの方を振り返り、英語に切り替えるとこう言った。「あるご婦人が私にこう言ったんですよ。『ジェローム神父、なんとまぁ、おそろしいことでしょう、彼がキューバの海辺の海賊になり下がっただなんて！まったく！』ってね。それで私は言ったんですよ、『あぁ、マダーム、本当におそろしい事ですね、』ってね。『彼にこうしたことをさせたことについての私や貴方の罪は、神様はきっと許して下さいますよ』ってね。」

ジェローム・トンプソンは手短に答えた。

「ご婦人にそういうことを言うべきではありませんでしたな」

「おやまあ、それはどうしてですか」

「なぜって、もしも貴方にも彼女にも彼のしたことの責任の一端があるというのでしたら、彼の名誉を守るためにもっと適切な言葉があったのではないか，ということです。」――それから弁護士はフランス語に切り替えた――「彼は海賊ではありマセン、彼はただ他国商船拿捕（だほ）免許状を得て、スペインの旗のもと、他の国の船に対して報復的拿捕を行ってるだけデス、というような、弁護の言葉をね。」

「ソンナ馬鹿丁寧でもってまわった言い方なんてとんでもないデスよ！」とエヴァリステ・ヴァリアット医師がフランス語で叫んで、ヴァリアットと彼の義理の兄である司祭は笑い始めた。

「どうして馬鹿丁寧でもってまわった言い方だと思うんデス？」とトンプソンが聞くと、

「オヤオヤ！」と医師は言って、肩をすくめた。「まあ、海賊をソウイウご丁寧な言い方で表現することも出来るとしておきましょうかね」

それから、急に真剣になって、医師が何か言い足そうとしたところ、ジェロー

ム神父がこう言い始めた。

「では私も貴方にお伝えできるだけのことは言っておきましょう。確かに私はこう言うべきでした。『ご婦人、全くその通りです。彼がそんなことをするなんておそろしいことですね。彼は暗闇の中でつまずいてしまったんです。でもね、あの正しき神がいるのに彼はさらに悪い方向にいってしまったんです。どうあれ、神の光を打ち消してしまったのは彼なんですよ。』」

「けれども、どうしてその、海賊をしているのが彼だと分かるんだい？」とトンプソンはけんか腰になって聞いた。

「ドウヤッテ知ったかって？」と小柄な司祭はフランス語で言った。「アァ、簡単なことですよ！キューバの北海岸からやってきた船の停泊する港では、我々の元に届く物語の百のうちの九十九の話が全て、海賊の指揮官で、驚くほど礼儀正しい男についてであり、しかもそれが彼だという話になっていて、それ以外の説明がまるでないからデス*。」

「ソレデ、その名前がラフィットと言いたい訳なんだな」とトンプソン弁護士は頑固そうに言った。

「しかしながら、逆にどうやってラフィットじゃないというんデス？」とジェローム神父が強弁した。

「そうそう、海賊の正体はみんなラフィットなんデスよ」とエヴァリステ・ヴァリアット医師が言った。「我々はみんなそういうことにしておけばみな満足するということを知っているんデスよ」

すると、ジェローム神父は机の上に身を乗り出して、いかにも秘密といった具合に、フランス語でこう言った。

「でもね、先週の月曜日にここの港にやってきた船についての噂デスが、その船にもまた、海賊が乗っていて、その船の指揮官がみずから海賊として他の船を追いまわしているんじゃないかっテ」

「なかなか興味深いお話デスな」とトンプソン氏は言った。

「ウソかマコトかというところでしょうが、こんな話を旅行者から聞きましたよ。その海賊船に占領された船に一人の若くて美しい女性が乗っていたのだが、デッキにでてみると、海賊の長がその船を占領しようと船に乗ってきて、命令

を下そうとしていたところだった。そんな絶望的な状況の中、じつに見事な行動をしたのがこの若い女性で，その海賊の長に面と向かうと小さな祈禱書を広げて示して、使徒信条のところを読めといったそうデス。彼はそれを読むと、読んでいる間にうやうやしく頭の帽子をとって、怖じ気づくことなく自分を見ているその若い娘を見つめて、低い声で『この祈禱書を頂けましたら、貴方の言う通りにいたしましょう』と言ったのデス。彼女がその祈禱書をあげて、どうかこの船から出て行って下さい、というと、彼はその船から何も強奪することなく去って行ったそうデスよ」

ジェローム神父はえくぼのある笑みを浮かべて、医者と弁護士をかわるがわる、幾度も見つめた。

「けれども彼は英語を話したんですかネ」と弁護士のジーン・トンプソンは言った。「彼は、きっと、我々の前から去った後、英語を習ったんでしょうナ。」と司祭は言った。

「しかしその被害に合った船の船長も、やはり、彼の部下たちが彼をラフィットと呼んでいたと言っていますヨ」

「ラフィットですって？まさか。まだお分かりにならないんですか？（おだやかに）貴方の義理の弟、ルメートル、ルメートルなんですよ、その海賊の長はウルシン・ルメートルだったんデス！」

冗談だろうという顔をして紳士二人は目を見合わせた。そしてすぐに笑い始めた。

「ああ」と、三人とも立ち上がりながら、医師は言った。「あなた、そのふざけた冗談は、くだらない噂話として、使用人の黒人にでも話してやるときまで取っておくといいデスよ」

ジェローム神父の目がきらりと光った。

「信じないんですネ！それなら、そういうことにしましょう！」

「あなたに言っておきマスが」とエヴァリステが、重々しく司祭を見ながら言った。「もしそれが本当でしたら，私は貴方に、一も二もなく、なるほどわかった、こういうことだナ、ということでしょうよ。ウルシン・ルメートルはその祈禱書に感服したのではなくて、きっとその娘が好きになってしまったん

でしょうナ！」

それから微笑むと、彼はジーン・トンプソンを見て、それからまたジェローム神父を見た。

「けれども、どうあれあなたはそのお話しを教会の集会でお話するでしょうし、そのときに聴衆に向かって、彼はじつに祈禱書のことをとても大事なものだと考えていたのだ、とでも言うんでしょうナ」

ジェローム神父はその夜、おそくまでかかって手紙を書いていた。彼の心はなにかひとつの考えに支配されているらしく、その考えは今のところ、彼を取り巻くまわりの雰囲気にだけ影響を与えているかのように思われるが、かれの一心に考えていることが何かは，彼の手紙を見れば分かるだろう。かれが書いているのはそれまで何度もやり取りしてきた手紙の一つであり、皆が正体を疑っていたその人物、信じられないような行動をとった海賊と、ジェローム神父は定期的に連絡を取っていたのだった。

第５章　お似合いの帽子

このような会話が行われてからほぼ二ヶ月ほどたって、ちょうど 1821 年のクリスマスの休暇の頃、ジェローム神父は自分の小さな教会の集会で、次の安息日には、この小さな教会ではなく、あの大聖堂でフランス語で説教を行う、という知らせを伝えて信者たちを喜ばせた。

彼は司祭としてたいそう人々から愛されていた。彼のことについては、聖職者の中にはやれやれといった様子で首を振ったり、眉をひそめたり、あるいは少なくとも彼があまり聖書のことばかりをいわず、そしてまた教義をあまりにないがしろにしないでいれば、正統派らしく見られるだろうという者が二、三人いたにもかかわらず、「聴衆は彼の言葉を嬉しそうにきく」のだった。ある日、あなたの評判について少々芳（かんば）しくないことがささやかれていますよと聞いたときには、彼はそういってくれた人に少し笑って――彼はそういっている人が自分のことを噂している当人だということがわかっているのだ――親切そうに肩に手をかけると次のように言った。

「マーフィー神父」――あるいは名前など誰でも良いのだが――「貴方の言葉

はいつも私を安らげてくれますよ」

「どういう意味だね？」

「だって、『あらゆる人が私のことをよく言ってくれる時には、悲しみが私のところへ押し寄せる』というじゃありませんか」

大聖堂での説教の日がやってくると、その日の朝は申し分のない日で、宇宙全体が調和しているかのようであり、人々の宗教心はその心から泉のように湧き出るのだった。

「まことに」とジェローム神父は聴衆の中で彼を助けてくれる助手に言った「今日は最高の安息日だ。こんな日は、我々は聖なるものを生み出そうと思わず、ありのままの尊さをそのまま維持すれば良いようだね」

説教師としてのジェローム神父の成功の秘密のひとつは、自分がどんな風に言うべきか、ではなく、自分がどんな風に感じるべきかをより考えるというところにあった。

この頃の大聖堂は大変質素な古い建物と呼ばれ、そこには誇るべき美しさも豪華さもなかった。しかし、ジェローム神父にはその大聖堂は大変愛らしいものに見えたのである。そして、彼にとっては決して地味ではない、そこの地味な祭壇の前でおごそかな職務を果たし、天国のまことに偉大な真実をさし示し、オルガンの調和のとれた音に、さらに聖歌隊の人間の声が雄弁に混ざり合うのを聞きながら、柔らかな色彩の光の中でひざまずく聴衆たちを眺めて、合唱隊の天へとささげる芳香を嗅ぐと、ジェローム神父は深く清らかな喜びにつつまれた。そしてどうやら、そのあいだに彼の魂に最もすばらしい考えが何度も浮かんできたようであった。

「だまされてはいけない、ジェローム神父、なぜならここでは聖なる気持ちになるなどあたりまえのことだからだ。お前は今朝寝坊をしたときのままとかわらない、つまらぬ司祭というだけにすぎない。そして明日かあさってには、なんらかのかたちで、また間違いを犯すのだから」

賛美歌の「来りたまえ、創造主なる聖霊よ」がうたわれている間、彼はそう考え、説教壇の方に行った。彼の説教のことばのなかには、伝統的なものはほとんどなかったけれど、それらの言葉はひどく力強く優しいものであった。

「我が友よ、」と彼は言った――これはほとんど冒頭のところでだ――「聖書の中における神の怒りの言葉はまことに恵み深いものデス。それらの言葉は私達を天国という故郷に帰るように促してくれるからデス。けれども神の優しい言葉は、おお、我が友よ、そのような言葉は時におそろしいものデス！考えても見て下さい。神に祝福された殉教者の口から漏れた最も心優しい祈りの中でも最も心優しいことば、[人々から石を投げつけられて殉教した] 尊き聖ステファノの死に際の言葉『主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい』（使徒言行録 7.60）ということばは、聞きようによっては実におそろしい言葉ではありませんか！こう読んでみましょう。『神よ、この罪を*彼らには*負わせないで下さい。』彼に石を投げた人々に罪を負わせない？それでは、誰の罪だというのでしょうか。神聖なる聖パウロの言葉を聞いてみましょう。三年後、エルサレムの神殿で、彼はこの問いにこう答えました。『聖ステファノの血が流された時、私もその場にいてその石打ちに賛成し、彼を殺す者たちの上着の番もしたのです』彼は自分のことについてのみ語っていましたが、けれども裁きの日はいつかきっとやってきて、聖ステファノを石打ちに追いやった意地の悪い評議員は全員、そしてエルサレムの町にいる者たち全員、その手を挙げて、『私達もデス、神よ、――私達もその石打ちに賛成したのデス』ということになるでしょう。ああ！我が友よ、あの死にゆく聖人が自分を殺す者たちを許すようにと祈ったその簡素な言葉のなかには、私達が皆お互いに罪深い存在であるというおそろしい真実が隠れているのです。」

こうしてジェローム神父は彼の基調演説をはじめたが、我々聴衆のための言葉を語ったのはほんのわずかだった。

「ああ！」と彼は一度だけ叫ぶと、「もしも私だけの罪を自分だけであがなえばいいということなら、私は残りの全ての人間の前に私の顔を向けることもできるでしょう、けれども、いいえ，いいえ、我が友よ――私達はお互いに自分の顔もまともに見ることができないのデス、なぜならお互いがお互いの罪を助長してしまっているからなのデス。ああ、あらゆるものが堕落するこの世界の一体どこに、人間の誇りを保つ余地などあるのでしょう。たとえもし我々が誰にでも共通する希望を持っていないと言うなら、誰にでも共通する絶望によっ

て我々はつながり、互いにあざけりあうことを永遠にやめることしか出来ないのではありませんか！」

そしてまた、こんなことも言っていた。

「洪水で人間の種を滅ぼすことは二度とないだろう、という、箱船をつくったノアに向けた約束においてさえ、厳かな人類への警告のささやきが込められています。ノアの洪水以前の積もり積もった不道徳の行いをすっかり清算しようと、大洪水というかたちでそのツケが一気に回ってきたのデス。しかし今また人間の罪のツケはたまりにたまってきており、あの神との約束の虹自体、神はその怒りを下すのを最後の裁きの日まで待っているだけだと言っているにすぎないように見えます。おお、神よ、その裁きの日が最後に来ることに感謝します。その日こそ貴方がこの世界を滅ぼし、私の罪が日々いや増すことから解放してくれるのデスから！」

ほぼこう言い終わったときに、ジェローム神父は以前気がついたときよりもずっとはっきりと、彼の近くに座っている信者たちの中に、感じの良い身なりをしてはいるものの、暗く沈みこんだ、小柄な、悲しそうな顔をした女性が、彼の方をじっと深い眼差しで見つめているのに気がついた。彼女と一緒にいるのは、その顔と首を几帳面に厚いヴェールで覆って、そしてその小さな手を手袋で覆っているものの、もっと良い身なりをした、みたところまだ十代の少女であった。

「混血だナ」と深い憐れみの心を掻き立てられながら、司祭は思った。

いちど、彼は人々の心の宗教心を掻き立てるような言葉をしゃべりながら、一度ちらりとその母親と娘（もしも彼女たちが母親と娘の関係ならばだが）のほうを見てみると、彼女たちは二人とも彼をじっと見つめて、お互いの手をしっかりと握り合うのをみた。彼女たちをそうさせたのは次のような言葉であった。

「我が友よ、ニューオーリンズの町には何千という人々がいますが、その社会に神はどうやらあらゆる禁止の言葉を消し去った十戒の掟を与えたようデス。ああ！善良なる紳士の方々！神によってかわいそうな身体の弱い者が道を外れたことの罪を清めに煉獄に送り込まれる一方で、むしろその煉獄にさらに針のむしろやいばらをまき散らすような、より罪深い者もいるということなのデ

ス！」

司祭は彼女らに注意を払っていたので、その二人組の仕草を見てとった。彼は次のような言葉を言いながら、また彼女たちをちらりと見た。

「おお、神よ、このような時代に、この聖なる朝のルイジアナで私達のもとにいる信心深い、父親にも母親にも恵まれることなく、ただ天と地との間で信仰という訓練を受けただけで、天国へと近づいてゆく子どもたちにどうかお慈悲をおかけください。ああ！わが友よ、自然こそは大きく神の意志が印刷された信仰の教理問答集なのデスから！」

その母親と娘は少し前屈みになって、以前と同じように痙攣するようにお互いの手を握り合った。母親の目は涙でいっぱいになった。

「私は以前ある男を知っていましたが」とその小柄な司祭は続け、医者のエヴァリステ・ヴァリアットと弁護士のジーン・トンプソンがお互いに通路を挟んで座っている側面の通路をちらりと見た。「ソノ男は小さな頃から立派な成人になるまで、果敢な反逆ということだけを注意深く教えられてきたのでした。神の裁きも、正しい行いも、自分の利益になることも教わることはありませんでした。ただ反逆することだけを教わったのです。神への反逆、人間たちへの反逆、自然への反逆、理性への反逆。反逆、反逆、反逆の人生でした。」

「あいつ、あのことを言うつもりだ！」と医者のエヴァリステ・ヴァリアットが弁護士のジーン・トンプソンにささやいた。

「この男は」とジェローム神父は続けた。「メキシコ湾の海賊、あるいは少なくとも密輸業者となってしまいました。神よ、彼の罪を彼だけに負わせることがありませんように！けれども、その後奇妙なことが起こったのデス。その種の男どもの指揮を取るには厳しく節度のある距離を保つことが必要であるため、彼は今、人間の住む世界を離れて、海や広々とした空気、海の嵐や、あるいは昼と夜の天国のような静けさ、といったものとの厳粛なつながりの中に身を投じているのです。我が友よ、それらこそ彼が生涯で初めて見いだした、真にお互いに繋がり合った友人たちだったのデス。

「今では、この男は罪を重ねているという表現にまさにぴったり来る男でしょう。彼は罪を重ねています――彼は現に罪をなしているのです。でも彼にとっ

て、正確に、その行いのために正統に与えられる罪がキッチリ計り終えられてから、締め切り済みの勘定として与えられる罪の重さは、彼にとってうるわしいものなのです。己の背負うべき罪が不足していたらそれは醜いと感じるのです。その結果は明白です。その男は、夜ごとに眼下に深い海を見てその上には星の瞬く大空という、広大で清らかな自然の風景を見ながら、遅かれ早かれ、自分はこのような壮大な世界を作り上げた偉大なる創造主である神が、自分の行いの罪の重さを量っていることを自覚し、確信するのです。そしてある夜、まるで海を渡る精霊のように、おそろしい、沈黙の中の問いがやってくるのです。『自分が神に対しておかした罪の報いは何だろうか――どうやったらそれに耐えられるだろうか？』ああ！友よ、その問いこそ、自然という偉大な教科書でも答えることのできない問いなのです。

「私は自然こそは偉大なる教理問答集だと言いませんでしたでしょうか？その通りです。しかし、その教理問答集も，最初の答えを『神』と答えた後は、ただ問いだけが延々と続くのです。そして、ある日、この男は商売品をいっぱいに積み込んだ船を略奪せずに、その代わりにこれらの問いに答えてくれる小さな聖なる書物を手に入れたのデス。神が彼にそれを理解するようたすけてくれたのでした！そして神はあなた方も助けてくれます、紳士淑女の諸君、*密輸された*服を着て、ここに座っている方々よ、どうぞ私とともに胸を打ち、こう叫んで下さい、『私もです。神よ。私たちにもまた、罪はあるのです』と。」

ジェローム神父はこれらの言葉で自分の説教を終えようとは思っていなかった。しかし、ちょうどそこで、彼の目がまっすぐ見ている先の、最も遠いところのドアのところに、一人の男がゆっくりと席から立ち上がって、彼の方を親切そうな、青銅色に日焼けした、穏やかな顔つきでじっと見つめたので、まるでその命令に従うように、司祭は自分の説教をそこでやめてしまったのだった。キリスト教ミサ曲のクレドの楽章がうたわれ始めている間も、男はずっとそこにいて、しかし、その楽章が終った後、ジェローム神父が改めてその方向に目を向けると、その男の立っていた場所はもぬけの殻だった。

その小柄な司祭が、自分の説教を終えて衣服を着替えて、ロイヤル通りを歩いて大聖堂がすっかり見えなくなるほどになると、彼はようやくそこで、二人

の女性が、明らかに自分が追いこすのを待っているのに気がついた。司祭が彼女たちの横を通り過ぎようとすると、クレオール語の（フランス語なまりの）方言で、司祭に近い方の女性が、すこし急き込んだ調子でこう話しかけてきた。

「オハヨウゴザイマス、ジェ・・・ジェローム神父様。ジェローム神父様から，あのような立派な説教をきくことができましたこと、神に感謝しておりマス。」

「ソウデスネ、私も今日はとてもイイお話ができましたヨ」と小柄な司祭は言った。彼女たちは彼が説教しているときに見かけたあの二人組の女性たちだった。若い方の娘は黙って挨拶した。彼女は美しい容姿をしていたが、ジェローム神父の親切な眼差しが厚いヴェール越しにその姿をはっきり見ようとする努力は無駄に終わった。彼は通り過ぎようとしたが、話しかけてきた方の女性がこう続けた。

「貴方様（あなたさま）はウルスライン通りに住んでいらっしゃるトカ」

「ええそうです。この道を通って、病気を煩（わずら）っている方に会いに行くんデスよ。」

その女性は、大胆なようであり、それなのにびくびくとしたようでもある、複雑に感情の入り交じった顔で司祭を見た。

「神サマの思し召しに従って働くとは、尊いことデスね」と彼女は言った。

ジェローム神父は微笑んだ。

「患者の病気を看病するのに、神様は本当は私などいらないんデスがね。けれども神様は私にそれをさせてくださるんデスよ。貴方（あなた）が衣装をちゃんと着た小さな小僧さんに小銭をやって、お使いにやっているようなものデシテね。」彼はあやうく、そうするのが自分は大好きなんだ、と言いそうになった。

その女性が何か聞きたいことがあるのは一目瞭然だった。そしてそれを聞こうと勇気を振り絞っているのだ。

「あなたは小さなお子さんがいるんデスか？」と司祭は尋ねた。

「いいえ、わたしはただ、娘がいるだけなんデス」そういうと彼女は傍らにいる少女を紹介した。それから彼女は何か別のことを言おうとして、やめた。それから少し神経質になりながら、こう聞いた。

「ジェローム神父、あの海賊になった男の名前はなんとおっしゃるのデス？」

「あの男？」と司祭は言った。「貴方（あなた）は、あの男の名前を知りたいとおっしゃるのデスか？」

「ええ、旦那様」（これを彼女は、旦那シャマ、と発音した）「それはそれは、うるわしいお話デシタので」その話をしている女性の連れである少女は、どこかよその方を向いていた。

「彼の名前は」とジェローム司祭は言った――「あるものはこれこれと言う名前だと言う人もいるし、べつの人物はまったく別の名前だという人もいますからなあ。中には、その男の名前は、あの有名な、ラフィットだという人もイマス。ラフィットのことを聞いたことがありマスかね？できれば、貴方（あなた）に私の教会に通っていただければ詳しい話をするんデスが？」

「ええ，旦那シャマ、今までは参加させていただいたことはないのデスが、これからは、ええ、きっとうかがわせていただきます。私の名前は――」するとそこで彼女は少しのどをつまらせて、しかし彼女は明らかに、この信頼の印である自分の名前を伝えることに、喜びを感じているようだった。

「デルフィーヌ夫人、デルフィーヌ・カラゼですわ。」

第６章　苦悩の叫び

数日後、訪問客の知らせに応じようと客間に入りながらジェローム神父が微笑みながら叫んだ声は、急な来訪に対する驚きというよりは彼の訪問客に対する心からの歓迎の意を表していた。

「ようこそ、デルフィーヌ夫人！」

しかし、驚きが全くなかったというわけではなかった。というのも、まだ次の日曜日が来たわけでもないのに、そのほっそりとして、小柄な人物が部屋の隅に腰掛け、全くひとりぼっちという風情で、洗いざらした粗末な布でできたように見える黒い衣装に身を包んでいるのが、ほからぬデルフィーヌ・カラゼの第二回目の訪問であったからだ。だが、そうはいっても、司祭はすでに、（第一回目に彼女が教会にやってきた時に）懺悔室でデルフィーヌ夫人の声を聞いていたために、すぐにこういうことになることは確信していたのだった。

彼女は恥ずかしそうに立ち上がると、手を差し出して、床に目を落とし、ためらいがちに話し始めた。のどに息をつかえさせては、弱々しく笑い、そしてまたそれまでと同じように、おだやかで低い声の調子で話し始めるのだが、しばしばその目を上げては、また床にその目を落とし、不安そうな様子とすまなそうな微笑みとがめまぐるしくその表情にあらわれるのだった。そうして、彼女は司祭の助言を求めようとした。

「ドウゾお座りなさい」と司祭は言った。そして二人とも椅子に座ると、彼女はまた伏し目がちに話し始めた。

「モウご存じでしょう――たぶん私はこのことを懺悔室で告白するべきだったんでしょうが、でも――」

「かまいませんよ、デルフィーヌ夫人、よくわかっております。おそらくあなたは、神のお告げなど聞きたくはなかったんでしょう。ただあなたは話を聞いてくれる友人が欲しかった。違いますかナ？」

デルフィーヌ夫人は目をあげた。その目には涙がきらきら光っていて、そして再び彼女は目を落とした。

「私は」――彼女はそこでしばらく話すのをやめた。「私はしてしまったんです。ソノ――」デルフィーヌ夫人はがっくりとうなだれると絶望しきったように頭をふった――「ひどく残酷なことを。」そう言うと、彼女がかぶりを振るたびに彼女の目から涙がぽろぽろと流れだした。

ジェローム神父は黙ったままだった。そしてしばらくすると、デルフィーヌ夫人はついに話そうというはっきりとした決意をもって、司祭の方を向いた。

「もう 19 年前のことになります――ソノコロ」――そういうと、デルフィーヌ夫人が司祭の方へ上げていた目は、ふたたび床へと落ちて行って、それまでよりもっとずっと下の方をみつめて、彼女の額も首も恥ずかしそうに真っ赤に染まるのだった。そして彼女はつぶやいた「――私は恋をしていました」

彼女はそれ以上何も言わなくなったので、ようやく司祭が言葉を継いだ。

「いやはや、デルフィーヌ夫人、愛するというものはあらゆる人の魂にとっては当然の権利デス。私は愛を信じております。もしもあなたの愛が純粋で法にかなったものであれば、貴方の守護天使はあなたに微笑みかけてくれるでしょ

う。そしてもしそうでないなら、あなたには釈明の余地がないとは私には言えませんが、たぶん神様でしたらこういってくださることでしょう、『彼女はあわれな混血女だ。彼女の女らしさがもつ権利は苦境の中で踏みつけにされてしまった、彼女は罪を犯しやすい状況にあった――ほとんど強制的に罪を犯すようにさせられたようなものだ――その罪の咎は、それをしむけた者に与えられよう』と」

「いいえ、いいえ！」とデルフィーヌ夫人は言って、素早く目をあげた。「ソノ咎（とが）のいくぶんかは――」そういうと、彼女はまた目を伏せて、おちつかなげにスカートの細かな皺をつまみ、唇をかみながら言葉を継いだ。「アノ人は善良な人でした――法の許す限りにおいて、善良な人でした。いいえ、それ以上でした。実際、あの人は私に財産を残してくれたんデス。そんなことは、厳密に法を適用するなら許されないことだったんですけれども。あの人は私達の間に出来た小さな娘をひどく可愛がってくれました。あの人はあの人の母親と姉妹の方々に手紙を書いてくれて、すべては自分のせいなのだから、どうか彼女等に、子供を引き取って育ててくれと頼んだのデス。あの人が亡くなったあと、すぐに私は自分の娘をその人たちへ託しました。そしてそれから、十六年もの間、私は自分の娘に会っておりませんでした。けれども私達は別れて以来ずっと手紙のやりとりをしていて、娘は私のことを愛してくれているのです。そして――とうとう――」デルフィーヌ夫人はそこで話すのをやめたが、彼女の興奮して震えた指先は熱心に、彼女の膝のところのスカートの裾がへんに縮れているところをひっきりなしに引き延ばしているのだった。

「そしてとうとう、あなたの母親としての気持ちが勝ってしまったのデスね」とジェローム神父は言った。

デルフィーヌ夫人はうなずいた。

「あの人の姉妹もみなお嫁に行ってしまい、あの人の母親も死んでしまったのです。わたしは、彼女がそのままそこにいても、けっきょくは彼女の血からも、そして彼女の生まれからも逃れることはできないと思いました。ソレデ、あの娘が私のところに戻ってきたいと言ってきたときに――」そういうと、話し手は涙であふれんばかりの目を急に上げた。「バカなことだと分かっているんデス

――でも私は、おいでと言ってしまいました」

涙が彼女の手をつたってドレスに落ちた。

「その娘というのは、この前の日曜日に貴方と一緒にいた娘さんのことデスか？」

「ソウデス」

「ソレデいま、あなたは自分の娘をどうしたら良いか分からないと？」

「アア、ソノトオリデス――そのとおりなんです！」

「アナタの娘さんの見た目は、アナタにそっくりなんデスか？デルフィーヌ夫人？」

「ああ、ありがたいことに、神様！それが全く違うんです。司祭様でもきっと、あれが私の娘だなんて信じないでしょう。あの娘の肌はとても白くて、大変な美人なんデス！」

「あなたの運命を困難にしている娘さんが、しかし美しく育っていることについて、アナタは神に感謝なさるとおっしゃっているのデスな、デルフィーヌ夫人」

「まことに！そのとおりデス」

ジェローム神父は腕を弓なりにするくらい力を込めて、掌をぴったりと膝に押し付けた。それから目を地面に落として、じっくり考えた。

「思うに、娘さんは優しくて、トテモいいお嬢さんなのでしょう？」と司祭は声の調子を変えずに、デルフィーヌ夫人の方をちらりと見ながら言った。

デルフィーヌ夫人は返事をする代りに、うっとりと眉を上げた。

「そうするとですな、これは全くの難問ということになりますナ」と司祭はまるでそれを床に向かって話すように言った。

「その娘にとって、この場所は全くの別の惑星に降り立ったのと同じくらい、異質な場所ということになりますからナ。」司祭は突然、ひらめいたとでも言うように目をあげたが、すぐにまた目を床に落とした。彼のうまい思いつきというのは、娘を修道院に入れるということであったが、彼はすぐにこう思い直した。「この母娘だってその選択肢があることはわかっているはずだ。だがそのことはわざと考えないようにしているんだろう――それくらいのことをする権利

は、この母娘にだってあるんだから。」彼は何も出来ずに、ただ力なく首を振るばかりだった。

「それに、アナタが急に死んでしまったりすることもありますからナ」と司祭は言った。彼はなるべく最も最悪な事態を最初に言おうと思ったのだ。

　するとデルフィーヌ夫人は、急に起き上がって、まるで窒息でもしそうな勢いで自分の顔をハンカチーフに埋めると、こう叫んだ。

「アア、かわいそうなオリーブ、私の娘！」

「アア、デルフィーヌ夫人」とジェローム神父は陽気な調子で話しかけた。「ただこのことは確実ですよ。私達は必ずこの困難を乗り越えること方法を見つけ出さなければイケマセン」

「アア！」とデルフィーヌ夫人は天を仰ぐと叫んだ。「もしソウできたら、どんなにいいでしょう！」

「キットできますとも！」と司祭は言った。

「でも、いったいドウヤッテ？」と失意の底に沈んだ夫人は尋ねた。

「アア！」とジェローム神父は肩をすくめるとこう言った。「それは神様ばかりがご存じですよ」

「そうですわネ」と混血のデルフィーヌ夫人は言うと、その優しい目がきらりと光った。「私は存じております、もし神様がそのいい思いつきをお与えになるなら、キットあなたに与えられるでしょうことを！」

　司祭は微笑んで立ち上がった。

「そう思われますか？それでは、ドウゾ私に考える時間をください。わたしが神様に良い知恵をくださるよう，お願いしてみましょう。」

「キット神様がいいお知恵を授けて下さいます！」と彼女は答えた。「そして神様はキットあなた様を祝福されることでしょう！」彼女は立ち上がると、司祭に手を差し出した。その手を引いたときには、彼女は微笑んでいた。「私、ヒドク変な夢を見ましたの」彼女は玄関に向かいながら言った。

「ソウなんですか？」

「そうなんです。きっとあなた様の説教と私の悩み事がごっちゃになってしまったんですわ。私はあの海賊が私の娘の守護天使になるなんていう夢を見て

しまったんデスの」

ジェローム神父も微笑むと、肩をすくめた。

「デルフィーヌ夫人、あなたのような立場デスと、この国の白人の男たちは全員、陸にいようが海の上にいようが、すべて海賊のようなものでしょうし、そんな海賊の中では、あなたの言っている男は、間違いなくもっとも良い海賊だと思いますよ。」

「間違いなくそうですわ」とデルフィーヌ夫人は司祭の言葉をおうむ返しにくりかえして、性も根も尽き果てたという様子で、引き下がろうとあとずさった。ジェローム神父は前に出るとドアを開けた。

すると人影がするりと敷居を乗り越えて、男が一人、入ってきた。彼は濃い青のコットンシャツを来て、頭にかぶった素敵なパナマ帽を持ち上げると、ちょうど帽子がかぶるところの色が白くなって、その下の部分だけ日焼けして、そのひどく柔らかく縮れた茶色の髪の毛を優雅に後ろに梳いているなめらかで広い額がのぞいた。デルフィーヌ夫人はちょっとびっくりして脇へ寄ったが、ジェローム神父の方は黙って、しかし力強く手を伸ばすと、自分よりも大きいその手を握り、その手の主に身振りで椅子に座るように促した。デルフィーヌ夫人はおびえて目を上にしてみることもできなかったが、かろうじてその訪問者の靴がよく船乗りが履くような、白いデッキシューズだということを見て取った。

「ソレデハ、ジェローム神父様」と彼女は、口早に小声で挨拶した。「あなた様によい思いつきが訪れますよう、いつもマリア様にお祈りいたしマス！」

「ソウ、出来るだけ早くそうなるとよいですな、デルフィーヌ・カラゼ夫人。それではごきげんよう、デルフィーヌ・カラゼ夫人」

そしてデルフィーヌ夫人が退出すると、司祭は新たな訪問者の方を振り返って両手を広げると、混血の女性に向けたのと同じような親しみのこもった方言で、こう言った。

「ごきげんヨウ、我が友よ！ずいぶん長いこと会わなかったネ！」

彼らはまるで夫婦のような親密さで隣り合って座ると、司祭は相手の手を取りながら、過ぎ去った年月の間に起こった出来事を話し、そして彼らの幼なじ

みの医者のエヴァリステ・ヴァリアットと弁護士のジーン・トンプソンのことをしばしば口にした。

デルフィーヌ夫人は家に帰る途中で立ち止まり、ジェローム神父の家へ戻ってきた。司祭の家の玄関のドアは大きく開いており、客間のドアも少し開いていた。夫人は玄関を通って伏し目がちに客間のドアの近くに立つと、ノックをしようと思って手を挙げたが、突然ドアが開いて白いデッキシューズの男が通り過ぎて行った。それに加えて、彼女は、その男が先ほどと同じ青いコットンシャツを着ているのを見て取った。

「どうぞ」とジェローム神父の声が聞こえて、ドアのところに司祭の顔がのぞいた。「オヤ！ご夫人――」

「わたくし、パラソルを忘れましたの」と、デルフィーヌ夫人は英語で言った。

夫人の穏やかで臆病そうな物腰には、静かだが、大胆で反抗的なところがあった。そのため、おそろしく伝統的な禁止令にもかかわらず、夫人は彼女の階級である黒人の血を引いた自由市民に義務づけられたターバンの代りにボンネットをかぶり、パラソルを持って外出することを常にしていたのである。

ジェローム神父は部屋の中に入ってパラソルを取ってきた。

彼は後から入ってきた訪問者が消えて行った方向を示しながら，こう言った。

「デルフィーヌ夫人、アナタはアノ方をご覧になりマシタか？」

「オ顔は拝見いたしませんでした」

「アノ男がこれから何をしようとしているか、私が言っても、アナタは多分信じないでしょうネ！」

「ソウでございますか？ジェローム神父様」

「アノ男はこれから銀行をオープンするんですヨ！」

「マア！」デルフィーヌ夫人は言うと、自分がさも驚いたかのように見えているかしらと考えた。

ジェローム神父は明らかにずっと今まで秘密にしてきたことをしゃべりたくて仕方がなかった。彼はなんとかしてその衝動を食い止めようとしたが、彼の心はつい何かを言わずにはおれなかったのだ。彼は腕を延ばすと、デルフィー

ヌ夫人の方を嬉しそうに向いて、口を開け，その伸ばした手を地面のほうに差し向けると、おごそかな小声で次のように言うのだった。

「彼こそは神に愛された銀行家なのデスよ、デルフィーヌ夫人」

第７章　ヴィヌヴィエイユ氏

デルフィーヌ夫人は自分の地所の一部を売った。彼女には収入というものがほとんどなかったので、時々遺産として引きついだ土地の一部を売らなければならなかったのだ。その売却の結果、彼女はたいそう高額の紙幣を自分のペチコートに縫い付けて持ち歩くようになった。そしてある日――おそらくジェローム神父のところでの涙にくれた面会から２週間くらいたってからであろうが――彼女はその高額紙幣の一枚をもっと小さな額の紙幣に両替する必要が出てきた。彼女はその時トゥールーズ通りにいた。道のこちら側から向かい側のほうを眺めて、銀行を探したのだが、そもそもその通りにはどこにも銀行がないはずだった。すると、彼女はあるドアの上に小さな看板がかかっていて、「ヴィヌヴィエイユ」という名前が掲げられているのが見えた。彼女はそこに立ち寄ってみた。そういえば司祭のジェローム神父が、（彼女が司祭のもとへと立ち寄ってどこで紙幣を両替してくれるのかと聞いたときに）もしも彼女が数日間待てるなら、トゥールーズ通りに新しい銀行ができるから、と言っていた――どう見てみても、彼女が判断できる限り、ヴィヌヴィエイユがその銀行の名前のようだった。それはたしかに銀行のように見えるし、それはまた、個人経営の銀行のようだった――彼女が勇気を奮い起こして入ったときに彼女の目に飛び込んできた「Ｕ・Ｌ・ヴィヌヴィエイユ」というデカデカとした文字も、それを示しているようだった。カウンターの向こうでは、外見からしていかにも忙しそうな男が、青いコットンシャツを着た男とそこで最後の言葉を交わして、それから急いで外に出ようとしてデルフィーヌ夫人の脇を通り過ぎていったが、その青いコットンシャツを着た男こそ、デルフィーヌ夫人がジェローム神父司祭のところの戸口で出会った男であった。いま初めて、彼女は彼の顔をまともに見た。その顔は屈強で、重々しく、人間らしい優しさがそのいちいち青銅色に輝く顔の特徴に見て取れた。目を合わせた途端、お互いに前に出会っ

たことがあるということを思い出し、彼のほうが、彼女が以前会ったときに使っていた言葉と同じフランス語なまりの言葉を使って、確かめようというような調子で先に話しかけてきた。

「どのような御用件デスか、ご婦人サマ。」

「ヨロシケレバ、この紙幣を両替して欲しいんデス」

彼女はポケットから紙幣を詰め込んだ黒ずんだ綿のハンカチーフを取り出し、それをほどいてしっかりしまっておいた紙幣を取り出そうとした。デルフィーヌ夫人はとても優しい声をしており、その声はヴィヌヴィエイユ氏の心にも響いたかのようであった。彼は応対している間にさらに英語で一言二言彼女に話しかけ、まるでその控えめで優しげな声の調子を楽しんでいるかのようであったが、しばらくして彼女が出て行こうとすると、彼は言った。

「カラゼ夫人！」

彼女は少しビクッとした。しかし、すぐに彼は自分の名前をジェローム神父司祭の客間で聞いたのだなと考えた。あの善良な司祭は彼女が最初に司祭の元から出て行った後、彼女のことについて少しばかり話をしたのだろう。あの司祭はいつだって話したくて仕方のない人なのだから。

「カラゼ夫人、」とヴィヌヴィエイユ氏は言った「たったいま、私とアナタとの間に交わされたような高額紙幣には、よくマガイモノが横行しておりますよ。そういった高額紙幣には注意しなくっちゃならないデスな。お分かりでしょうが――」彼は引き出しから、彼女に両替してやった高額紙幣とよく似たものを取り出すと、それが本物かどうかを試す幾つかのやり方を教えた。偽札は、これこれこうという特徴がある、と彼は言った。

「じゃあ」と夫人はおろおろしながら叫んだ。「その特徴があるのが私の高額紙幣デスわ！それはきっと――私が差し上げた高額紙幣を見せてください、もしよろしければ、旦那様」

ヴィヌヴィエイユ氏は向こうを向いて従業員と新しい訪問客と会話をはじめて、デルフィーヌ夫人の声を聞いているそぶりを見せなかった。夫人はもう一度頼んでみたが、同じ結果だったので、しばらくの間ためらってそこに立っていたが、三番目の訪問客に彼が注意を向けようとしたときに、もう一度聞いて

みた

「ヴィヌヴィエイユ様、ドウゾ私に――」

「カラゼ夫人」とヴィヌヴィエイユ氏は言うと、まるでおびえている小柄な夫人を脅かすように急に振り向くと、しかし、あけっぴろげにその掌をひろげて、やさしく忍耐強い表情を示しながら、「ソレデハ、ここにある紙幣すべてから、そういった偽札を全部見つけ出せと言うのですかな？アナタがそうしろと言わないことを私は望むのですが」

かすかな微笑が彼の顔に浮かんでいた。だが、その微笑はただ彼の顔によりいっそう威厳を付け加えただけだった。そして彼がこれで終わりといった様子で向こうを向くと、デルフィーヌ夫人はもうここを離れるしかないのだということがわかった。しかし、夫人はＵ・Ｌ・ヴィヌヴィエイユ氏の足下の地面をいとおしそうに見つめながら、頭を垂れて後ずさったのだった。

「アラ、ジェローム神父様！」数日後、路上で小柄な司祭を見かけて、デルフィーヌ夫人は彼女の階級特有のなまったフランス語で叫んだ「あなたが先日の応接までおっしゃったことは本当でしたわ！ワタクシ、トウトウアノ方とお知り合いにナリマシタ！とうとうあの人とお会いしたんデス。貴方のおっしゃった通りの人でした」

「彼の銀行にあなたの口座を開かなかったのデスか？デルフィーヌ夫人。」

「ちょうど今日、そうしたところなんデス！」彼女は答えると、ジェローム神父が今まで見たこともないほど幸せそうな目をした。

「デルフィーヌ夫人」と司祭は目を輝かせながらこう言った「ヴィヌヴィエイユ氏をアナタの娘さんの後見人になさい。司祭として、ワタクシはそれが一番の方法だと思います。どうぞ彼にお願いしてみたらいかがデスか。彼はきっとアナタの願いを断らないでしょう。」

デルフィーヌ夫人の顔は、彼がしゃべっている間にもっと明るい表情になった。

「私もソウ思っていたんデス」と彼女は言った。

しかし、臆病なデルフィーヌ夫人は次から次へといろいろとつまらないことを気にして、この申し出をなかなか言い出せなかった。そして何週間も過ぎて、

もうこれ以上引き延ばすことができないくらいほど切羽詰まってしまった。しかしとうとう、1822年のある日、ヴィヌヴィエイユ氏の銀行の後ろにある小さい個人用の事務所で――ヴィヌヴィエイユ氏はテーブルの横に座って、デルフィーヌ夫人のほうは、いつもよりもっとおびえて控えめな態度で、入り口のすぐ近くの椅子に座っていた――すこし恥ずかしそうな笑みを浮かべながら、このことはなにも重要なことではないというようなそぶりで、しかし声を少し震わせながら、こう言った。

「ヴィヌヴィエイユ様、私、お話しする決心がついたんです」（二人は出会ったときに英語で話したので、それ以来その他の言葉ではしゃべらなかった）

「それはよかった」と銀行家は答えた。

「ヴィヌヴィエイユ氏、私のお願いを、聞いて下さいますか？」

「もちろんです」

彼女は心からの感謝を示しながら、その答えを確かめようとでもするかのように目をあげた。けれども、すぐにまた目を落とすと、こう言った。

「ヴィヌヴィエイユ氏――」そこで息が詰まって、彼女は指を振るわせて、もう癖になってしまった、あの服の皺をのばすような仕草をはじめた。彼女は目をあげると、彼の顔には深く落ち着いた親切そうな表情が浮かんでいたので、彼女は勇気を取り戻して、こう言った。

「旦那様」

「どうしてほしいのですか？」と彼は優しく尋ねた。

「もし私が死んだときには――」

「ええ」

デルフィーヌ夫人の声はほとんど聞こえないくらいになった。

「私は、アナタに私の娘の後見人になってほしいんです」

「アナタにはまだ小さい一人娘がいらっしゃるのですね、カラゼ夫人」

デルフィーヌ夫人は顔をしたに向けたままうなずいた。

「そのほかにはお子さんはおられますか」

「いいえ」

「アナタにお子さんがいらっしゃるとは知らなかった。その娘さんは、まだ幼

いのですか？」

良くあることだが、母親というものは自分の娘をいつまでも小さな子供だと思いがちである。デルフィーヌ夫人はこたえた。

「そうなんです」

しばらくの間、どちらもしゃべらなかった。それからヴィヌヴィエイユ氏がこう言った。

「そういたしましょう」

「アナタご自身が生きている限り、アナタが面倒を見ていただけるんですね？」と、デルフィーヌ夫人は大胆にもつい聞いてしまった。

「その娘さんは、小さないい子なんでしょう？」

「ええ，旦那様、あの娘は小さな天使みたいなんです！」とデルフィーヌ夫人はまるで嘆き悲しむように叫んだ。

「ええ、私が生きている限り、その子の面倒を見ましょう。お約束しますよ」

「では――」まだデルフィーヌ夫人には考えがあるようだった。

銀行家は黙ってデルフィーヌ夫人が話し始めるのを待っていた。

「私の小さな娘にお会いになりますか？」

ヴィヌヴィエイユ氏は微笑んだ。デルフィーヌ夫人の様子は、まるで断ってほしいといわんばかりだったからだ。

「なに、私はアナタの言葉をそのまま受け取っておきますよ、デルフィーヌ夫人。いずれ会うことになるでしょうから、アナタの娘さんに会おうとは思いません。」

デルフィーヌ夫人の別れ際の笑顔には――デルフィーヌ夫人はそのあとすぐ退出したのだった――声もでないほどの感謝の気持ちがあらわれていた。

ヴィヌヴィエイユ氏は椅子に戻ると、新聞を読み始めた――おそらく、ルイジアナ・ガゼットだろう――その新聞は、デルフィーヌ夫人が入ってきたときに読みかけていたものだった。彼の目は、その前に注意を向けなかった段落に目が止まった。そして彼の目はその部分をじっと見つめた。飽きずにそれを何度も読み返したり、またすっかり考えにふけったりした。半分アメリカ人で、弁護士であるジーン・トンプソンが入ってきた。

「ヤア」とトンプソン氏は声を押し殺した様子でいって、テーブル越しに少し前に身をかがめると、片手に持った書類の束にもう一方の掌をあてがいながら、こう言った。「万事手筈が整ったゾ。これで、六時間以内に、誰の損にもならずにお前さんは自分の仕事から手を引くことがデキル」（ここであろうがどこであろうが、英語ではっきりと言えることはフランス語でもやはりはっきりといえるものなのだ）

ヴィヌヴィエイユ氏は目をあげると、法律家の友人に手に持っていた新聞を示した。法律家はそれを受け取ると、指し示された段落を読んだ。その内容は、アメリカ海軍のある船がメキシコ湾とフロリダ海峡の巡航からかえってきたのだが、その海域で海賊の取り締まりに大層な手柄を挙げたとのことだった。記事には、一月の二週間の間に、最後の十二隻の大型海賊船と、二隻の建造中の海賊船、そして海岸にある三つのアジトを破壊したのだとある。

「アメリカ海軍の船、パーポイス号か。」と、ジーン・トンプソンが声に出して繰り返した。「この船のこと、知っているのか？」

「この船とは大変なオシリアイでね」とヴィヌヴィエイユ氏は言った。

第８章　彼女

すこし時代遅れだが、きちんとした服装で、やさしいが力強く、そして考え深く物思いに沈んだ顔をしながら、静かな足取りで、少し前かがみになって、銀行へ通じる歩道に新たに重々しく姿を現したのは、トゥールーズ通りに現れた新たな人物であり、それは杖を持った背の高い人物で、マリグニー運河の柳の木々のしたの夕暮れの光に照らされて、コンティ通りの薄暗くて細長い窓がまた再び照らされる時刻に、物思わしげに歩く人物であった――これで全てだった。ひとしずくの雫のしたたりも、ウルシン・ルメートル・ヴィヌヴィエイユが自分の生まれ育った地域へと帰還したときの静けさには及ばないほどであった。

けれども、この帰還した人物に正確な名前を当てはめるのは難しい。行方知れずになったのはルメートル船長であったのに、戻ってきた人物の名前はヴィヌヴィエイユ氏となっているからだ。喜びや、悩み、あるいは仲間といった、

激しい性格を持つ若者ならだれでもかつてはとらわれたことのあるこれらのことも、もはやこの、デルフィーヌ夫人の銀行家となった人物には何の魅力も感じられなかった。彼の祖父が彼に教え込んだ誇りの高さの為にも、このことは言っておいた方がいいと思うが、彼は低俗な楽しみに溺れることなく自分を高く保っており、王や女王といった人々やその召使いたちと、ポルトガルの都市ファロ、ブラジルのロンデアウ、スイスのクラスプといった場所の怪しげな迷宮に入り込んで戯れるときも、それを高潔な態度でこなしていた。けれども今ではもうそのような世俗のつきあいとは彼は一切手を切っていた。幼なじみの医者のエヴァリステ・ヴァリアットと弁護士のジーン・トンプソンも、もしもヴィヌヴィエイユ氏と会いたかったら、自分たちから探さなければ彼に会うことはできなかった。

「こうするのが一番いいんだ」とヴィヌヴィエイユは客間で会ったその日にジェローム神父に言ったのだった。「ウルシン・ルメートルは死んだことになってる。私が彼を埋葬したということにしたんだ。彼は遺言を残したということになっていて、そしてヴィヌヴィエイユはウルシン・ルメートルの遺言執行人というわけさ」

「そんなことをして自分の正体をごまかすなんて、あいつの頭はどうかしてるんじゃないか」と、我慢がならないといった調子で、彼の義理の弟の弁護士が言った。

「おやおや、全くその逆デスよ」と小柄な司祭は言った「彼は自分から自分の正体を明かしにやって来たのですから」

エヴァリステ・ヴァリアットが口を開いた。

「ジーン、彼の顔を見てご覧よ。あんな顔をした男が気狂いのはずがないだろう」

「まだ証明された訳じゃない」と、弁護士らしい頑固さでジーン・トンプソンは答えた。「あの新聞記事の一段についてヴィヌヴィエイユが話していたのを君も聞いただろう。『ワタクシはウルシン・ルメートルの首をとりました。ワタクシはその首を持っております。ワタクシはこの首で取引をしたいのだが、報償として市民権をいただきたい』だとさ。狂ってるだろ」

もちろんジーン・トンプソンは彼の言っていることを信じなかった。けれども、イライラしながらも、ヴィヌヴィエイユはウルシン・ルメートルの遺言執行人だという話を何度も繰り返し、長椅子の上に座っているときや、社交クラブでも話すのだった。そして今ではそれがさも本当らしい噂となってしまい、帰還した海賊は結局、甲板の上でルメートルという獲物を得意げに示して吠えていた、ルメートルならぬヴィヌヴィエイユ氏という少々頭のおかしい人物だということにとなってしまった。

このようにささやかれていた噂は、彼の行動の様々な奇矯さによって尾ひれをつけられ、彼の説明しがたいほどに奇妙な仕事上の取引のためにいっそうひどくなった。

「なんてこった」と、ある日、びっくりながら弁護士のトンプソンが叫んだ「君は慈善施設を運用していないのかい！」

「どうやってそれを知ったんだね？」とヴィヌヴィエイユ氏は言って、それで会話はおしまいとなった。

「慈善施設として病院と精神病棟をいっぺんに建ててしまって」と、別の機会にイライラしたような笑顔を浮かべて、弁護士は言うのだった「それで信用を増したらいいじゃないか」

「そんなことをしたら、初めは良くてもあとで評判が悪くなるばかりだよ」と銀行家は言って、微笑むと、台帳の載った机の方に向かうのだった。

「ふん！」とジーン・トンプソンはつぶやくばかりだった。

ヴィヌヴィエイユ氏には唯一悪い癖があった。外に出かけると、いつも辺りをうかがって誰かを警戒しているかのようなそぶりを見せるのだ。彼に興味があって、彼の動作をよく観察している人でなければそれはわからない程度のものであったが、その癖に気づくと、彼がそれをいつもやっていることがわかるのだ。彼はあいているドアや門をくぐるときには、中をうかがうような動作を必ずするのだった。そしてしばしば、戸がほんの少し隙間の空いている場合は、彼がその手や杖を使ってゆっくりそれを開けるのがわかる。それはじつに風変わりな癖だった。

彼はよく夜中に一人で歩いた。その頃、夜になると街でことさらおそれられ

ていた強盗（わたしたちなら、首絞め強盗というところだが）は、彼の通る道にはけっして現れなかった。彼は、悪事の方で彼を避けるような、そんな人物の一人だったのだ。

あらゆる生き物が恍惚となってしんと静まりかえっているようなある美しい夏の夜、沈みゆく太陽の名残の光線の最後のひと刷毛が空から消え去るころ、ヴィヌヴィエイユ氏は考え深い、だれも連れのいない散歩のためのいつもの道を歩いていたが、ロイヤル通りのもっと開けた場所にさしかかって、無意識のうちに静かに歩みを進めながら、時折自分のがっしりと太い杖の端をさわり、船に乗っていたころからの古い友人である星を見上げるのだった。

こういった南部のある夜に、その魔術によって、理性の最も根元にある活力の源泉もおとなしく眠りにつき、その代わりに夢想と想像力が、眠りにつくことなく、その足かせをするりと抜けだして逃げ出し、花の咲き乱れる茂みや甘い香りの漂う木の後ろへと手招きし、たった一人でぼんやりと照らされた道を歩く散歩者という、あらゆる意味で真の詩の心をもった人たちを誘おうとする。ときおり空気が優しくかきまわされ、まるでそよ風がその今か今かと待ち受けている翼を広げて、もういちどそれを振り下ろし、静けさの中で、崇拝するかのようにしんとしている草原や道、庭や壁、あるいは都会の、あるいは半ば都会の街路に光をそそぐ、月が昇るのを待っているかのようだった。そしてほどなく、月が昇ってくるのだった。

ヴィヌヴィエイユ氏の歩みは街の中心部へと向かい、彼はほどなく道の右側に、高い、締め切った、木の板を立てつけた塀で囲まれた庭のある場所にやってきていた。その木の板の上からは中に植えられたオレンジの木の褐色の枝が木の板の塀を越えて頭の上まで伸びていて、マネシツグミが夜じゅう泣き通すフルートのような鳴き声をし始めたばかりであった。この鳴き声の主の鳥がとても近くで鳴いていること以外、この場所に人の注意を引きつけるものは何もないが、しかしヴィヌヴィエイユ氏は立ち止まると見上げるのだった。

それから彼はもっと別のことに目を留めた――彼が足を止めた場所では、ナイトジャスミンの強く甘い香りが漂っていたのだ。彼は見回してみた。その香りはこの塀の中からに違いなかった。すぐそこに門がある。いつも試してみる

ように、その扉を開いてみようか？その門の周りには芝生の草が鬱蒼と生い茂り、まるでその入り口がもう何年も使ってないかのようだった。鉄の留め釘が閂（かんぬき）に打ち付けてあり、門柱にまで食い込んでいた。けれども、いま、一度は鍛冶屋をやっていた目でみてみると――その目はのちに釘を使って修繕をするための訓練を受けることになった目なのだが――その釘に目を留め、一目でその木と釘とがもうすっかり離れ離れになっており、しっかりと止められているわけではなく、ただ落ちていないばかりであることが分かったのだった。奇妙な習慣が、それを確かめさえした。彼が試しにその大きな手を閂（かんぬき）の所に置くと、下に生えている芝生の草をそよがせて、戸口が半ば開いたのだ。

そのとき、ドアや戸口、あるいは窓を開いたときに彼がいつもするように、彼の頭の中には、彼が堕落へと進んで行くのを引き止めて、彼の人生を引き上げてくれた、彼の心の中にあるあの美しい娘の顔を思い浮かべているのだった。

鳥が鳴くのをやめた。一歩足を踏み入れようとする気持ちで、戸口の開いたところにたっていると、彼の目の前に、その木陰が陽の光と複雑に入り組んだ中に、広い、手入れの行き届いていない、たくさんの花々が咲き乱れた庭があり、その手入れのされていないバラの木と入り組んだつる草の中に、そしてまた、砕いた貝殻の敷き詰められ、ココ草やメヒシバが密集した昔ながらの小道と、たくましい雑草が生い茂っていた。彼は足を踏み入れ、そして彼の後から戸口を閉めた。そして、すぐ近くに、その強い香りが彼を誘ったジャスミンのやぶが生い茂っていた。そのジャスミンの藪は月明かりで明るく照らされた小道の向こう側にあり、その小道は彼のところから曲がって右手の方に少し離れた屋敷へと続いており、その先は影になって見えないが、その家の入り口へとつながっているようにおもわれた。彼がなおも様子をうかがっていると、その曲がり角のところから、砕いた貝を敷き詰めた道を踏む軽い足音が彼の耳に聞こえてきた――その足音はたった一回だけで、その後はまたしんと静まり返った。彼の聞き間違えだろうか？そうではない。おなじ軽い足音がまた近くで聞こえ、木々の梢の隙間からかすかに上着が見えた。それから、はっきりと、その人影が見えて――現れたのは――何かの影――何か精霊のようなもの――女の子だった！

その喉元から足の甲まで、その女の子は神話の中に出てくるシンシアのように真っ白な肌をしていた。平均的な身長よりは少し背が高く、痩せていて、しなやかな体つきをしていて、豊かな髪が色濃く豊かな波をうって額から後ろになでつけられていて、頭頂部から垂れ下がって、二つのたっぷりした三つ編みになって幅広のガートルでまるくおおわれた彼女の胴をとおって彼女の膝まで垂れ下がっていて、おくれ毛がすこしばかり軽く彼女の優美なうなじとこめかみの辺りに軽く渦巻き――そして彼女の両腕は、白い霧のように体を覆っている服のたもとに半ば隠れて、まっさらなスカートを露に濡れた草で染みをつけないように下に下げられていた――そして彼女はまさにその小道を通ってこちらに近づいてきていたのだ！

彼女は立ち止まるだろうか？横道にそれていくだろうか？オレンジの木に隠れたくらい木陰に潜んだこの人影に気づいて、耳をつんざくような悲鳴をあげて、身を翻して消え去るだろうか？彼女は近づいてきた。彼女はジャスミンの茂みに近づいて、両手をあげると、両肩から白い霧のようにドレスのたもとが広がった。爪先立ちに近づいて、ジャスミンの小枝を引っ張っている。思い出した！だがそんなことが？そんなことがあるだろうか？これが彼の探していた彼女なのだろうか、それともこれは何かの気の迷いが見せている幻なのだろうか？ヴィヌヴィエイユ氏の足元の地面がまるで波打つ海のように揺らぐように感じた。そしてまるで今自分が甲板の上に立っているような気がした。そして彼女は？そして彼女は今、もしも自分のいるオレンジの木のほうを向いたなら、明るく照らしている月の光が彼女の顔をすっかり照らすだろう。彼の心臓は止まりそうだった。彼は彼女が自分のほうを向くのを待っていた。彼女はまた手を伸ばした。今度は母親のために小枝の束を折ろうというのだ。あのうなじと喉元！今度は彼女は自分のおくれ毛を整えている。さっきまで黙っていたツグミがもう我慢がならないというように再び鳴きはじめて、――彼女はそちらのほうを振り向いた――彼女はその顔をこちらに向けた――そうだ、この娘だ、この娘だった！デルフィーヌ夫人の娘こそ、ヴィヌヴィエイユ氏があの甲板の上で出会った少女だったのだ。　［つづく］

*原注：当時の新聞を参照。